

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

オノマトペ(擬音語擬態語)について

著者	田嶋 香織
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	16
ページ	193-205
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005897/

オノマトペ（擬音語擬態語）について

田嶋 香織

要旨

日本で生活しているとあらゆる場面でオノマトペ（擬音語、擬態語）表現と出会う。オノマトペ（擬音語、擬態語）表現は、他の語彙とは違い、外から受ける刺激を我々が感じ取った通りに文字にしているかのようで、学ばずとも自然に習得できていると思われがちである。実際にはその用法には様々な法則があり、日本語学習者にとって自然に習得できる語彙群ではない。この感覚の語彙群オノマトペについて考察していく。

【キーワード】 オノマトペ 擬音語 擬態語

1. はじめに

日本語の特性の一つとして、オノマトペ（擬音語、擬態語）を使った表現が非常に多いということが挙げられる。「雨がザーザー降ってきて、ビュンビュン風が吹き付ける。」、「ソロリソロリと近づき、コソコソと耳元で話した。」、「子供たちは水をゴクゴク飲み、目の前のケーキをムシャムシャ頬張った。」、日本人なら誰もがこれらの文を読んだ時、雨風が激しい様子、音を抑えた動き、勢いよく飲食している様子を容易に思い浮かべることができる。それはザーザー、ビュンビュン、ソロリソロリ、コソコソ、ゴクゴク、ムシャムシャ、これらの表現が雨風、静かな動き、飲食の様子があたかも目の前にあるかの様に、直接的に表現されているからである。いわゆるオノマトペと呼ばれるこれらの表現、日本語には数多くあり、日本語を豊かにする一つの要因となっていると言えるだろう。

ある音や状態を簡潔にそして具体的に表現することのできるこのオノマトペはテレビ、ラジオ、新聞、本、雑誌などいたるところで目に耳にすることができる。「フカフカのベッド」、「カサカサの肌がツルツルに」、「サクサクした歯ごたえ」。コマーシャルなどでよく耳にするこれらのフレーズをオノマトペを使わずに表現すると、「弾力があ

ってしかも肌触りのよいベッド」、「水分の不足した肌が柔らかで滑らかな肌に」、「乾燥して軽い歯ごたえ」となる。長く説明がくどいこれらの表現に比べるとオノマトペを使った前者の表現の方が、インパクトがあり、一言でそのベッド、肌の様態、歯ごたえをわかりやすく伝えているのではないだろうか。

日本での生活では常に近くにありながら、日本語教育の現場においてはあまり注目される機会の多くないオノマトペについて、その分類、用法、また日本語学習者のオノマトペに対する理解度について考察していく。

2. オノマトペ(擬音語、擬態語)とは

2.1 定義

実はオノマトペに関しては、古くは江戸時代から研究がなされており、以後様々な観点から研究がなされている。ここでオノマトペについて簡単に説明しておこうと思う。大きく分類するとオノマトペには、鳴き声や人の声を描写した擬声語（ワンワン、ニャーニャー、エーンエーン等）、擬声語以外の音を表した擬音語（ドンドン、ゴロゴロ、パタパタ）があり、また、動作、事物の様態、状態を表した擬態語（キョロキョロ、ピカピカ）ある。擬態語の内、特に人の感情、心理状態を表したものを擬情語（イライラ、ウキウキ、ソワソワ）と呼ぶこともある。本稿では擬声語と擬音語をまとめて擬音語、擬情語を含む擬態語を擬態語とする。

2.2 分類

オノマトペには、もちろん前出した「ゴクゴク」「ムシャムシャ」等の繰り返し語だけではなく「フラリ」、「ガタピシャ」、「ピタッ」、「キヤー」など同じ文字を繰り返さず、音や様子を表すものも数多くある。天沼寧（1974）によると、その文字の組み合わせの法則により、オノマトペが47もの型に分類されている。繰り返しだけではなく、促音、濁音、り音、などを入れることで様々な音や様子が表すことができるのである。例えばカラという2モーラの表現を基本として、カラッ、ガラ、カラリなどいくつかのバリエーションができる。促音、り音、長音などを付けることによりそれぞれの持つ微妙なニュアンスが付加されるのである。しかし、これらの数あるパターンの中で一番多いのは、繰り返しの表現で、これは全オノマトペ表現の約3割を占めている。繰り返し語は日本語だけでなく、多言語におけるオノマトペでも見られるらしい。英語の oink-oink（豚の鳴く様子）や音が一部変化しているものの繰り返し語に近い tick-tock（時計、心臓などが鳴る音）ding-dong（鐘の鳴る音）などである。また日本語と同様に

オノマトペが多く存在する朝鮮語でも、ハルランハルラン（雪が降る様子）、トウットウツ（滴が落ちる様）、ワグルワグル（ひしめきあう様子）などが存在する。連続的又は断続的に続く音、動作、様子を表す時、繰り返しの言葉を使うことにより、その時間的な長さを表しやすいからだろうか。

3. 活用

次にオノマトペの活用も見てみたい。オノマトペは動詞、形容詞、副詞、名詞として使われる。

3.1 動詞として

まず、「ニコニコする」、「ムカムカする」、「ブラブラする」など「一する」を伴って動詞として使われる用法がある。これは一部の擬音語を除き、大部分は擬態語表現から成る。

ニコニコする
ペコペコする
ムカムカする
ムラムラする
チャラチャラする
ブラブラする
ドキドキする
グラグラする
ネバネバする
ゴロゴロする
ギトギトする
ウルウルする

3.2 形容詞として

「ツルツル（の）お肌」、「ピカピカの一年生」など「一の」を伴って後ろに続く名詞を修飾したり、「喉がカラカラだ」、「熱でフラフラだ」など「一だ」が付き文末に来て形容詞的に使うこともある。

ツルツルのお肌
ピカピカの一年生。

ホカホカのカイロ
ピチピチのシャツ
ツンツンの頭
モジャモジャの髭

水がこぼれて床はビチョビチョだ
古い鍋はもうボロボロだ
緊張で体がガチガチだ
熱でフラフラだ
英語がペラペラだなど

3.3 副詞として

「ガタガタ言う」、「キラキラと輝く」、「ピカピカに磨く」など「一と」や「一に」を伴い副詞的な用法をすることもある。「一と」をつけて副詞となるものは「と」がなくても自然な文であるが、「一に」が付く表現は「一に」を抜くと不自然な表現になる。

ガタガタ言う
クルクル回る
ゴシゴシこする
スラスラ書く
スクスク育つ
ミシミシ軋む

ポロポロと落ちる
キラキラと輝く
サラサラと流れる
ダラダラと過ごす
ケタケタと笑う
ユサユサと揺れる

ピカピカに磨く
ガラガラにすいた電車

コチコチに固まる
キンキンに冷える
ビリビリに破る
トロトロに溶ける

3.4 名詞として

また最近では「ドキドキが欲しい」「ヌメヌメの原因」など「ドキドキする物事」「ヌメヌメになってしまった原因」の後半部分を省略し「ドキドキ」「ヌメヌメ」の部分だけで全てを表す名詞的な用法も見られる。また他の名詞と結びつき複合名詞として新しい名詞になることもある。

ドキドキが欲しい
ヌメヌメの原因
コリコリがおいしい
顔のブツブツ
ガチャガチャを買う

ノロノロ運転
ピチTシャツ
カンカン照り
バラバラ殺人
カリカリベーコン
シャカシャカジャージ
ピリ辛
チャラ男

4. 幼児語としてのオノマトペ

オノマトペ、特に擬音語の多くは、耳から入ってくる音を、そのまま文字にして表しているように思われる。実際、そのため、大人がまだ習得語彙の限られている子供に話しかける時、「犬が来た」の代わりに「ワンワンが来た」、「しっかり噛みなさい。」の代わりに「よくクチュクチュしなさい」と、子供がわかりやすい様に言い換えることがある。他にも、

「グチュグチュペしなさい」 歯磨き、うがいしなさい

「ピーポーピーポーが来た」 救急車が来た
「フーフーしてから食べる」 息を吹きかけて冷まして食べる
「ブーブーで遊ぶ」 車で遊ぶ
「コチョコチョコするぞ」 くすぐる
「ポンポンが痛い」 おなかが痛い
「ポイポイする」 捨てる

など多くの表現があり、周りの大人が繰り返し使うこれらの表現を、子供たちは「歯磨き」、「救急車」などの語彙の前に習得し、自身も自ら使うようになる。こういったオノマトペの使用法から、一般的にはオノマトペは幼児語として捉えられ、幼く子供っぽい表現だというイメージがあるのではないだろうか。

5. 音象徴

5.1 清音、濁音

さて50音の組み合わせで数限りなくパターンが出来そうに思われるオノマトペであるが、常に個人が自由に文字を列べ、勝手に新しいオノマトペを作り出しているわけではない。各音の持つイメージに日本語を母語とする我々の間に共通認識があり、ある共通のイメージを持った文字の組み合わせでそのイメージに関連する音、様子を表している。

まず、清音、濁音に対して持たれる印象は全体的に共通しているようである。清音には軽快、清らか、小さいという印象が持たれ、濁音には鈍重、濁り、大きいという印象があり、時には否定的なイメージが持たれる傾向にある。これはあえてここで述べなくても、日本語話者であれば、「カタカタ」と「ガタガタ」、「サラサラ」と「ザラザラ」、「トントン」と「ドンドン」などその音、様子の程度で無意識に使いわけているだろう。

5.2 母音、子音

日本語の母音「あ、い、う、え、お」では、共通の一つ一つに異なったイメージがあるようである。例えば「あ」音では大きく外に広がったニュアンスがあり、「い」音は張りつめた緊張が感じられる。「う」音は内に抑えられたニュアンスがあり、「え」音は意外であり汚い感じもある様である。「お」音は内に籠もった丸く重いイメージだ。同じバ行のオノマトペでも「パラパラ」では雨などが軽やかに弾むように降る様子、「ピリピリ」では緊張した空気が、「プルプル」では外側にではなく内に向いた震える

様子、「ポロポロ」はこぼれ落ちる様子を表すなど、違った音、様子を表すことになる。似た状況を表すオノマトペ、例えば雷の音を表すカ行のオノマトペにおいても、「ガラガラ」と「ゴロゴロ」では、前者は空から落ちてくる雷の音を後者は今にも落ちそうな雷の雲の合間から聞こえてくる音を表しており、微妙にニュアンスは違う。

更に細かく考察すると、日本語の50音一つ一つの音においても比較的共通の印象が持たれているようである。丹野真智俊が行った研究(2005)によると、「し」は静かなイメージ、「ふ」軽い、「げ」汚い、「ぜ」苦しい、「ぷ」かわいいといった共通のイメージがある。例えば、何かを打つ音を表す時、軽く弾ける感じであれば「ポンポン」や「トントン」と表現し、大きく耳障りな音であれば「ガンガン」、「バンバン」などと表現すると、伝える相手にどのように打っているのか伝わるであろう。

詩や漫画など読者の想像力の広がりを求める言語活動では「のんのんのんのんのんのん(宮沢賢治)」、「ぺかぺか(宮沢賢治)」や、「ぴちぴち(谷川俊太郎)」、「ことばがポロポロ(谷川俊太郎)」など今までに挙げた使用頻度が多い既存のオノマトペとは異なる、その作者たちが新しく作り出したオノマトペや、一般的な使われ方と違った表現が使われることがある。これらもそれぞれの文字への共通のイメージがあるため、作者がイメージする音や様態に近いイメージを想像でき、しかも、新しい表現で既存の表現を使用した時以上に生き生きとした描写になるのであろう。ちなみに、この母音、子音に対するイメージは、日本だけではなく、日本語以外の言語でも似たような結果も見られることがあるらしい。例えば、英語の「bla-bla」はしゃべる音を、しかもどちらかといえば否定的な音を表しているが、これは日本語では「べらべら」と表現できるだろう。また雨が「パラパラ」と降る様子は「pitter-patter」という表現がある。

各母音子音に持たれているイメージに関して他言語においても日本語と似たイメージを持たれることがあると述べたが、では常に、ある音、様子を表す時に同じ音を使った表現になるのかといえば、決してそういう訳ではない。寧ろ日本語を話す我々が見聞いても、どんな音、様子を表しているか理解できないオノマトペも多く存在する。英語の「thumph」は頭などを「ゴツン」と叩く時の音を、「mutter」は「ブツブツ」と話している様子を表しているが、それだけを見れば一見どんな状況を表現しているか推測するのは難しい。

同様に日本語学習者が日本語のオノマトペ表現に出会った際、日本語を母語とする我々がオノマトペに接する様、感覚的にそのオノマトペが表す音、様子を想像し理解することは容易ではないこともあるようである。日本語学習者のオノマトペ理解に関しては後に述べる。

6. オノマトペの例

6.1 商品、会社名、テレビ、新聞、雑誌等におけるオノマトペの例

普段意識をしないで目や耳にしているオノマトペ表現であるが、ここでは日本での身近な生活で実際に使われているオノマトペ表現を挙げてみたい。

商品、会社名

ほっかほっか亭（ほっかほっか亭）

ゴキブリホイホイ（アース薬品）

プッチンプリン（グリコ）

ザクザククッキー（ロッテ）

ギザギザポテト（カルビー）

ぐびなま（アサヒ）

クー（コカコーラ）

おふろピカピカクリーナー（サンコー）

モミモミリアルプロ（ナショナル）

ぎゅぎゅっとクッション（ナショナル）

冷えピタシート（ライオン）

ピタットハスス

キャッチフレーズ、宣伝文句、説明など

おもしろいほどギョングюн長く（資生堂）

フワフワクリームのころころコロロン（グリコ）

毎日飲んで毎日サラサラ（サントリー）

ジュワッ！たれ仕上げ（グリコ）

シャキシヤキ食感のネギ（ヤマダイ）

アツアツカリカリの「からあげ」（味の素）

ジュワワーンと肉汁（味の素）

ピリピリ感などの肌の負担にならない（カネボウ）

すすいだ瞬間ギュッと実感（花王）

ぐんぐん消臭（小林製薬）

ゴロゴロ感を抑えて（ロート製薬）

ブルンが、満ちる（カネボウ）
風邪でガビガビ花粉でムズムズ（王子製紙）
コリをグイグイほぐす（ナショナル）
白く洗う、カラッとかわかす（三菱）
グツと楽電子番組表（三菱）
パンパンのむくみ（TBC）
ボロボロの姿で行ったら（TBC）
スベスベでツヤツヤのある肌（神奈川クリニック）
カチッと止まるまで（サランラップ）
ふわっと仕上げ（P&G）
ふかふかとつつみたい（ユニクロ）

新聞、雑誌の見出しなど

ガチガチ雅山（朝日新聞）
ドキドキしたら手術ミス？執刀医の、、、（朝日新聞）
おしゃれキラリ ひらめきヒントがギュッ（主婦と生活社雑誌）
大事なことがペラペラ言葉に、、、（Hanako 雑誌）

日本語話者はオノマトペを用いた会社名からその会社がどのような商品またはサービスを提供するかを容易に想像し、またオノマトペを用いた商品名、宣伝文句、キャッチフレーズからはその商品がどういった性質のものであるのかを瞬時に把握する。例えば、「ほっかほっか」亭という会社が「ジュワワーン」とジューシーな「カリカリ」からあげというメニューを売り出せば、日本語話者であればそのメニューの詳しい説明を聞かなくても、それが「温かい」食べ物を提供する会社であり、表面は「軽い歯触り」でありながら噛めば中から「肉汁が溢れ出そうな」からあげメニューを想像できるわけだ。数ある商品や会社の中で自社についてまたは自社製品について、一目でその性質を説明し、他社との差別化を図り、受け取り手の興味を引くためには、オノマトペ表現は便利な表現方法である。また、新聞、雑誌などの見出しでも、オノマトペを用いることで、その記事がどういった内容であるのか、どういった調子で書かれたものなのかが推測でき、読み手に興味を喚起させる。

6.2 漫画におけるオノマトペの例

最近の日本語学習者の日本語学習へのきっかけとなることが多くなった日本の漫画では、様々な音や様子がオノマトペを用いて表現されている。ある音、状態を具体的に表すのにオノマトペはその表現があまりに直接的であるため、読者の想像力の広がりを期待する小説などではあまり濫用を歓迎されない傾向があるが、インパクトを求め視覚に訴える漫画では、このオノマトペがあらゆる場面で使われ、その文字の大きさや配置の工夫も加わり、あたかも映画やテレビを見ているかのような臨場感を出す効果を与えているようだ。

- ガーン がっかりしている様子（講談社少女漫画）
- ポーッ 放心している様子（講談社少女漫画）
- ドキドキハラハラ 緊張している様子（講談社少女漫画）
- キュンキュン ときめいている様子（講談社少女漫画）
- バツバツ 物を速やかに動かす音（講談社少女漫画）
- カリカリカリカリ 書く音（講談社少女漫画）
- クスクス 笑う音（講談社少女漫画）
- パパーブウー 車のクラクションの音（講談社少女漫画）
- プルルルプルルルプルルル 電話の音（講談社少女漫画）
- モゾモゾ 体を動かす様子（講談社少女漫画）
- ヘロヘロー 気分が悪い様子（講談社少女漫画）
- ドヤドヤ 多くの人がやってくる様子（講談社少女漫画）
- ズズウ うどんをすする音（講談社少女漫画）
- ゴホゴホゲホッ せきをする音（講談社少年漫画）
- スタスタ 走り去る様子（講談社少年漫画）
- ジーコジーコ 機械仕掛けの物が作動する音（講談社少年漫画）
- ルンルン 浮かれている様子（講談社少年漫画）
- ジャーン 突然現れる様子（講談社少年漫画）
- ゴゴゴゴ 火が勢いよく燃える様子（講談社少年漫画）
- ギクッ 驚き狼狽する様子（講談社少年漫画）
- カシャカシャ カメラのシャッター音（講談社少年漫画）
- ウウー サイレンの音（講談社少年漫画）
- ガラガッシャー 物がこぼれ落ちる音（講談社少年漫画）

視覚に訴える漫画では、オノマトペもその文字の大きさ種類を変えることで、オノマトペが元々持つその音や状態を表す表現が、さらに効果的に使われている。その効果を高めるため、台詞などの言葉と違い、オノマトペ表現は手書きで書かれていることが多いようである。例えば、走り去る様子を表す「スタスタ」などは、その作中の人物が去っていく絵と共に字も小さくなっていく。その表現を読みながら読者はまるで実際にその作中人物が走り去る音を聞いているかのような臨場感を感じるのである。

7. 日本語教育におけるオノマトペ

さて、この様に巷で溢れるこれらのオノマトペ表現であるが、日本語学習者たちはどのような音、様子を表現しているか理解しているのだろうか。日本語能力の伸びに伴い、習得するオノマトペ表現は増えていくのであろうか。日本語教育において、特に初級レベルにおいては、オノマトペ表現を紹介している教材は少ないようである。主な日本語学習の初級教科書を見てみると、「げんき」(The Japan Times)では「じろじろ見る」、「ニヤニヤする」、「にこにこする」、「ペラペラ」などが新出単語で出ている。

「Yookoso!」(McGraw-Hill Publishing)ではオノマトペを一つの読み物で扱っており、「ニャー」、「ゴロゴロ」、「シーン」、「キラキラ」などが紹介されている。単語では「ノロノロ運転」がある。「なかま」(Houghton Mifflin)では「ずきずきする」が語彙リストにある。教材でオノマトペ表現があまり取り上げられない理由の一つは、先に述べた、オノマトペが幼児語だと捉え、語学の学習として学ぶに適當ではない語彙だと考えられているからだろう。また特に擬音語は耳にした音をそのまま聞いたとおりに文字にしているという認識があり、例えば「学校」「たいてい」などの任意で並べられた文字で事柄を表している単語と違い、音を聞いて文字で表現すれば自然に、ある擬音語になると考え、学び記憶する表現だとは捉えていないということもあるかもしれない。

実際に日本語学習者の日本語に接していると、オノマトペを駆使して日本語を書き、話している者はあまりいないように感じられる。中国、韓国を中心としたアジア圏出身の十五名の学生で構成される中、上級クラスで、様々なオノマトペ表現を意味及び用法を伝えず紹介し、それらのオノマトペを使って文を作るという活動を行ってみた。紹介したオノマトペは「アツアツ、イライラ、ウルウル、ウロウロ、オロオロ、カタカタ、カンカン、キラキラ、キリキリ、クルクル、ケタケタ、コトコト、サラサラ、シクシク、スルスル、ソロソロ、タラタラ、チクチク、チリチリ、チャラチャラ、ツルツル、ツンツン、テケテケ、トロトロ、トントン、ニヤニヤ、ニャーニャー、ヌルヌル、ネチョネチョ、ノソノソ、ハラハラ、ヒリヒリ、ブーブー、フラフラ、ヘラヘラ、ホイホイ、マ

ルマル、ミャーミャー、ムシムシ、メソメソ、モソモソ、モリモリ、ヤイヤイ、ユラユラ、ガタガタ、ガチャガチャ、ギシギシ、グングン、ゴソゴソ、ゴウゴウ、ザワザワ、ジュクジュク、ジワジワ、ズルズル、ゾロゾロ、ダラダラ、デレデレ、ドキドキ、バラバラ、ビリビリ、ビクビク、ピョンピョン、ブラブラ、ブンブン、ペラペラ、ボロボロ、ブンブン、ポロポロ」である。できるだけ五十音を満遍なく列挙し、擬音語、擬態語どちらも散りばめ、似た状況を表した表現も入れた。結果は、ほぼ全ての学生が理解していたものは、ニャーニャー、ワンワンなど動物の鳴き声、使用頻度が多いと思われるペラペラ、ニヤニヤ、ニコニコ、ドキドキなどの表現で、これらの表現は「日本語がペラペラになりたい。」、「テストの前はドキドキする。」など学習者は自然に運用できていた。それに続き、キラキラ、ウロウロ、フラフラ、ダラダラなどの理解が高かったものの、その用法には間違いも見られた。「新しい車はキラキラだ。」は「キラキラ」を輝いている表現だと認識しているが、瞬くような光を表しおり、新しくて綺麗な物を形容すると不自然になるという理解がなかったということだろう。全体としては、中上級日本語学習者が運用できる日本語語彙の質、量に比べて、彼らが理解し使用しているオノマトペ表現は擬音語、擬態語どちらにおいても、かなり限りがあるという印象であった。

8. 最後に

私達の生活の中で氾濫するオノマトペ表現、簡潔でインパクトがあり、目の前にその音、様態が体験できるかのような描写力であるが、日本語学習者にとってはなかなか学習する機会の少ない表現である。今後、日本語学習者がどのようなオノマトペ表現を習得しているのか、擬音語では実際に聞こえる音が感覚的にその音を表すオノマトペとして受け止めているのか、他の語彙と同様知識として記憶していくのか、未習の擬態語を見聞きしてその擬態語が表す様態を想像することができるのか、それともやはり、知識として学ぶのか等の問題について日本語学習者を対象に調査を行えば、興味深い結果が得られるであろう。その結果をふまえて、授業内で効果的にオノマトペを紹介できる方法を探っていきたい。

参考文献

青山秀夫編著(1991)『朝鮮語象徴語辞典』大学書林

天沼寧編著(1974)『擬音語擬態語辞典』東京堂出版

田守育啓著(2002)『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波出版

丹野真智俊著(2005)『オノマトペ 擬音語擬態語を考える』あいり出版